

4

章

学習評価と授業の振り返り

学習評価とは、学校における教育活動に関し、生徒の学習状況を評価するものです。

生徒に力を身に付けさせることができたかどうかという学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようするためにも、学習評価はとても大切です。

4章では、学習評価の在り方と、授業の実践を振り返る具体的な方法及びその活用について説明します。

1 「学習評価」とは

☆評価の「妥当性」と「信頼性」

学習評価に当たっては、その評価方法及び評価結果が、目標の実現状況を測るという点から妥当で信頼できるものになっているかとすることが重要です。

例えば、生徒やその保護者に対して、単元（題材）の評価規準や評価方法等の学習評価の方針についてあらかじめ周知する等、妥当性と信頼性のある評価を目指していきましょう。

☆個人内評価

観点別学習状況の評価や評定には示しきれないもの、特に「感性や思いやり」といった、生徒一人ひとりの良い点や可能性、進歩の状況等についての評価です。

生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で生徒に伝えることが重要です。

生徒への言葉かけ、ワークシートへのコメント記入等によって生徒にフィードバックしましょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

目標に準拠した評価

「目標に準拠した評価」とは、学習指導要領に示す目標に照らし、その実現状況を見る評価であり、生徒を相対的に捉える評価とは異なるものです。観点ごとに学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」と、総括的に捉える「評定」の双方とも、目標に準拠した評価で行います。

計画的に評価する

生徒の学習状況を適切に評価するには、評価規準に合わせて学習活動を構想し、評価方法を決めることが必要です。

その単元（題材）で何を身に付けさせるのか、ねらいを明確にするとともに、どのようにして生徒の思考や発言・行動を見取るのか、学習活動のどの場面で生徒の変容を見取るのか、「努力を要する」状況（C）の生徒へはどのように支援するかを想定し、評価場面を精選しながら計画的に評価しましょう。 → 2章－3、4

「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」

学習評価には二つの側面があります。

「指導に生かす評価」は、生徒の学習状況を分析的に捉え、その結果を教員の指導改善と生徒の学習改善に生かすために実施するものです。生徒の様子を観察し、日々の授業の中で常に行います。

「記録に残す評価」は、生徒の学習状況を把握し、記録するためには実施するものです。単元（題材）等のまとめの中で適切に設定した時期において、「おおむね満足できる」状況（B）にあるかどうかを評価します。 → 4章－2

「指導と評価の一体化」に取り組み、生徒のためのより良い授業を考えていきましょう。 → 2章－3、4章－7～9

小さな一歩を認めよう

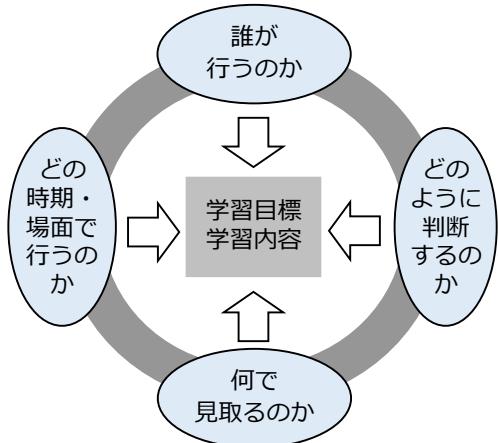
生徒が自分の進度で努力し、学習していることを認めましょう。小さな一歩を認めることで、生徒は自信を持ち学習することが楽しくなります。



評価方法の設定

評価活動には、生徒の行動や発言の状況の見取り、ペーパーテストやノート、ワークシート、レポート等の記述や作品からの見取り、自己評価等のポートフォリオ評価、パフォーマンステストによる評価等があります。評価方法は、評価規準と組み合わせて設定します。

図 評価方法の決定



評価方法の段階

観察・点検

- 行動の観察 … 学習活動の中で、評価規準で示されている行動の「観察」を行います。
記述の点検 … 学習活動の中で、机間指導などにより記述の内容を「点検」します。

確認

- 行動の確認 … 学習活動の中で、行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」します。
記述の確認 … 学習活動の中で、記述された内容を、ノートや提出物などにより「確認」します。

分析

- 行動の分析 … 「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて、その内容を「分析」的に評価します。
記述の分析 … 「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの記述の内容を「分析」的に評価します。

「学習評価を踏まえた授業づくりの道すじ」
(令和2年3月改訂神奈川県教育委員会より (一部改編))

☆評価方法の例

- ループリック
成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表。
→ 4章 - 5

- ポートフォリオ評価
生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して生徒の学習状況を把握とともに、生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示します。

学習活動の中での評価

例えば、話し合い活動のとき、どのような評価をすればよいのでしょうか。本時のねらいに合わせて考える必要があります。

一般的には、他人の話を聞いているとか発言をしているといった話し合いそのものの活動状況など量的なものを評価するのではなく、話し合いを通じてその活動のねらいを達成できているかといった質的なものを評価します。

2 学習の様子を見取る

☆観点別学習状況の評価の総括

観点ごとの評価の総括の場面は次の3段階であることが多いと考えられます。

①単元（題材）における総括

②学期末における総括

③学年末における総括

評定への総括の方法については各学校で共通理解を図ることが大切です。

【参考資料】

- ・「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
(国立教育政策研究所)
- ・「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」
(国立教育政策研究所)
- ・「学習評価の手引き」※
(神奈川県教育委員会)

→ ※のダウンロードは
P122へ

評価は成績を付けることだけが目的ではなく、生徒一人ひとりの学習を成立させ、質を向上させるために実施するものです。そのためには、生徒の学習状況をつぶさに把握する必要があります。

「指導に生かす評価」の場面

生徒の学習改善のために行う「指導に生かす評価」（4章－1）は、日々の授業の中で生徒の観察を通して実施します。この観察（評価）を通して、生徒がより良く授業に参加できるような指導（「言葉掛け」「促し」等）につなげます。毎時間実施するものですが、必ずしも生徒全員に行わなくてよいというものです。

「記録に残す評価」の場面

「記録に残す評価」（4章－1）は、観点別学習状況の評価として実施するものです。単元（題材）ごとの評価規準に従って、各観点とも単元（題材）で1回以上、評価する場面を設定します。「記録に残す評価」は、最終的に評定（成績）につながるものであり、生徒全員に対して実施します。

観点別学習状況の評価は、「おおむね満足できる」状況（B）を基準として、「十分満足できる」状況（A）、（B）、「努力を要する」状況（C）の3段階で行います。生徒全員が（B）以上となるよう、授業の中で指導を行いましょう。

「記録に残す評価」を実施する方法は多くあります。次の【例】を参考に、「記録に残す評価」をする場面を設定しましょう。

- 【例】
- ・小テスト
 - ・定期テスト
 - ・成果物（レポート、作品等）
 - ・ワークシートの記述（個人の気付き、授業後の振り返り等）
 - ・実演（実技試験、発表、プレゼンテーション等）etc...

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

見取りのヒント

評価（C）の生徒がどこでつまずいているかの視点で見取ることが大切です。生徒の読む・書く・話す・作業・集中・学習用具の用意・情緒の安定、などを考えてみましょう。



つまずいている生徒への手立て

学習の様子を見取りながら、具体的な手立て、他の資料や解答のヒントを提供する等の手立てを講じます。

つまずいている生徒が多い場合には、設定した（B）の規準が適切であったかについても、見直す必要があります。

学習評価に関するQ&A

Q1: 「小テスト」は全て成績に反映させるの？

知識の定着を図るため、毎時間授業の中で小テストを行っています。一年間を通して行うので膨大な量になり、処理が大変です。この結果は全て記録に残す評価として評定に反映させるのですか。

A1: 必ずしも「全てを」反映させなくともよい

もちろん、全ての結果を「知識・技能」の評価としても構いませんが、その処理に「時間と労力を掛けすぎない」ようにすることも重要です。

例えば、日頃の単語テストを「指導に生かす評価」として活用し、単語に関する「知識・技能」の総括的な評価は定期テストでまとめて実施する、という方法も考えられます。その際、何を「記録に残す評価」とするのかを事前に生徒に説明することが必要です。

Q2: 「対話的な活動」の評価はどうすればよいの？

「思考・判断・表現」の評価場面で、グループでの話し合いに参加しない生徒がいます。この生徒の観点別学習状況の評価はどうするのがよいのですか。

A2: 生徒の取組状況は「指導に生かす評価」に活用する

「よりよく話しをする」ということが単元の目標になっていない限り、質問のような「生徒の取組状況」自体が観点別学習状況の評価の対象にはなりません。

例えば理科の授業で、実験レポートをより良くするために、実験結果の考察をグループで共有する活動を行ったとします。ここで評価の対象となるのは完成した実験レポート（成果物）であり、グループでの話し合いの様子（取組状況）ではありません。

もちろん、実験レポートの内容を充実させるためには、グループでの話し合いの充実が必要です。そのためには、活動に参加しない（できない）生徒に対し、参加する（できる）ように促す、助言するといった指導や支援（「指導に生かす評価」）が必要となります。

Q3: 「主体的に学習に取り組む態度」は何を評価するの？

遅刻や欠席の多い生徒がいます。また、行動に課題があり、活動に参加しない生徒もいます。こういった生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の評価を「C」にしようと思っていますが、問題はありませんか。

A3: 学習を通して育まれた「教科の学習に即した態度」を評価する

「主体的に学習に取り組む態度」を生徒の日頃の授業態度を評価するものと捉えているケースがありますが、これは大きな誤りです。「主体的に学習に取り組む態度」は、各教科の学習に即した態度を対象としており、質問にあるような、生徒の性格や行動の傾向を評価するものではありません。

一般的に、単元の最後に行う振り返りで「何を学んだか」「学んだことをどう使うか」といったことについてワークシートに記述し、各教科の学習に取り組む態度を捉える、ということが行われています。なお、「主体的に学習に取り組む態度」については、4章-3に詳しく説明されています。

3 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

☆他の観点との関係は？

本文下線部にもあるように、他の観点との関連性が強い内容です。したがって、例えばノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではありません。

よって、単元末や学年末に他の2観点と極端なばらつきが出た場合においては、評価方法や授業内容を一度見直すなどの指導改善を図る必要があります。

☆いつ評価する？

「主体的に学習に取り組む態度」は、生徒の学習への継続的な取組を通して現れる性質を有することから、単元（題材）の最後に振り返りの場面を設定するだけでは不十分です。

右ページの事例にあるように、学習者が自分の学習状況を丁寧に見つめ直す振り返りができるよう、単元（題材）計画や教科の特性、学習スタイルに合わせて、授業者が適切な振り返りの場面を設けましょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

何を評価する？

「主体的に学習に取り組む態度」の評価においては、単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するのではなく、「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりするために、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという、意思的な側面を評価することが重要です。

「自らの学習を調整する」とは

生徒が知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行う中で、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意思的な取組のことです。これには大きく二つの要素があります。

①「学習の進め方」における調整

個人目標の設定 / 時間管理 / 取り組む順序の調整 / 協働者の有無
調査対象・方法の選択 / 調査量の選択 / 表現の工夫 / 援助希求 等

②「教科の見方・考え方」における調整

教科の見方・考え方を意識した試行錯誤

より意識していきたい要素は、②の「教科の見方・考え方」における調整です。各科目において、主体的に学習に取り組む態度の評価が観点として設定されていることを踏まえたとき、①の「学習の進め方」における調整のみでは、当該科目の評価としては不十分になります。「教科の見方・考え方」における調整を生徒が十分に行っていけるように働きかけていきましょう。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法

「主体的に学習に取り組む態度」の記述による評価を例示しましたが、考えをノート等に記述することが困難であるなど、配慮が必要な生徒がいる場合には、記述による評価を口頭による評価で代替することも考えられます。生徒の実態等に応じて適切な評価方法を選択することが考えられます。

時間の確保が大切

振り返りシートの記入時間は授業内に確保しましょう。後で提出させると、内容を忘れてしまったり、提出を忘れてしまったり、用紙を紛失したりするなど出しにくくなります。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法例

具体的な評価方法としては、振り返りシートやレポート等における記述、授業中の発言、教員による行動観察を、材料の一つとして用いることなどが考えられます。その際、生徒の発達の段階や一人ひとりの個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要があります。

振り返りシートの例

図1は、自らの学習を調整する活動をメタ認知するための商業科の事例（「令和6年度高等学校教育課程研究会研究報告 第4集」より）です。この単元で意識してほしい取組例を示すことによって、よりよい調整ができるように働きかけています。



意識して取り組めたところに「○」をつけよう。

視点	商業科の見方・考え方	自由進度学習		インピュ-準備		6
		1	2	3	4	
学びのコントロール例	目標の設定	個人で設定、目標の選択（チャレンジ目標、標準目標、復習重視）				
	時間の管理	時間配分の計画、残り時間の管理				
	調べる対象の選択	教科書、ネット、先生からの情報、友達からの情報				
	調べる量の選択	単一の資料、複数の資料、特定の人の情報、複数人からの情報				
	取り組み方の選択	協働する人数・対象、取り組む順序、分担の有無				
	問い合わせの創造	途中で思い浮かんだ疑問を書き留める、調べ学習を通して探究課題を作る				
	質の向上	他との比較（先生、友達）、自分とは違う意見や考えの反映、練習回数				
	表現の工夫	見やすさ、声の大きさ、表情、論理展開、まとめ方				
	状況に応じた対応	困ったときの打開策、残り時間に適したより良い目標の再設定				
評価	自己評価	目標への到達度、内容の理解度、分からぬ箇所の整理、次回への意識				

図1 「学びのあしあと♪」学びのコントロール例の記載

図2は、図1で意識して取り組んだことを基に、その時間の取組についてより丁寧に振り返りができる工夫をしています。

＜本時の振り返り：特に意識して取り組めたこと 次回、意識したいこと＞

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5

図2 「学びのあしあと♪」本時の振り返り

単元の終わりには、図3にあるように、「内容」、「自己調整」、「情意」について振り返りができる欄を設けています。振り返りシートにおいては、このように「教科の見方・考え方」や「学習の進め方」についての試行錯誤の様子や、自身の視座や価値、行動の変容、やりたいことの拡大などが見取れる工夫をしていきましょう。

＜単元おわりの振り返り：何がわかったり、できるようになったか 目標の到達に向けてどのように学びをコントロールしたか 今後どのようにしていきたいか＞



図3 「学びのあしあと♪」単元おわりの振り返り

4 テストから見取る

☆テストづくりは 授業づくりに通じる

テストは、生徒が学習活動で身に付けた成果を見取るものであり、言い換えれば生徒はどのようにものの見方や考え方を身に付けようとしていたのかをたどるものです。

つまり、テストづくりは授業づくりと密接な関係があり、今日求められる学力観を踏まえた実践に基づいて行なうことが大切なのです。

☆共通テストの留意点

評価の妥当性・信頼性を高めるために、科目ごとに共通のテストを実施することが求められています。それぞれ異なる授業を行う複数の教員が共通テストを行うためには、授業の実施前に、テストについての共通理解を持つことが必要です。試験範囲の確認に終わることなく、重視するポイントや授業での扱い方について事前に担当者同士で意見交換し、共通の目標を達成するための効果的なテストを実施するようにしましょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

学校におけるテストとは

テストは、何のために行なうのでしょうか。一般的には、「学習者の学力・能力を知るためのもの」と思われていますが、学校におけるテストの第一義は、「教員の教授活動の評価」のための資料収集です。生徒たちに教えた様々な事柄を、どの程度まで生徒たち個々が習得したかを見て、次の指導に生かす。ペーパーテストや実技テストなど形態は様々ですが、これが学校におけるテストの第一義です。

そしてもちろん、生徒自身が自分たちの達成度を知ることも、テストの大きな目的の一つです。テストの結果を見ることによって、自分が現在何ができるて何ができるないのか知ることができ、次にどのような学習努力をすれば目標が達成できるのかについて、指針が与えられるものでなければなりません。

そのためには、それぞれの問題が「どのような知識・技能や能力等をテストしているのか」を、教員が意識して作問するのはもちろんのこと、生徒自身がはっきり理解できるようなテストを作成することが求められます。ペーパーテストの設問ごとに観点別のラベルを表示するのは、そのためです。

目標の実現状況を測定するテスト

日々の授業は、目標（本時、単元、学期、年間の目標、学校教育目標）を実現するために行います。そして、その目標がどの程度実現できているのかについて測定するのがテストです。つまり、「目標」と「授業で何を学習するのか」と「テストで何を測るのか」が、密接に結び付いていかなければならないのです。

身に付けた資質・能力を見取るために

生徒の中には、書字に困難を抱える生徒や、文字認識に時間が必要な生徒、知的障害がある生徒など、様々な困難を抱える生徒がいます。また、けが等の理由により一時的に筆記が難しい状態にある生徒もあります。

例えば、解答用紙を拡大したり、試験時間を延長したり、問題を読み上げたり、問題用紙にルビを振ったりするなど、生徒の状態に応じた手立てを取ることで、こうした生徒の学びの成果を見取る工夫ができます。個別の配慮を行う際の手順について、所属校の方法を事前に確認しておきましょう。

ペーパーテスト作成の手順（例）

実際にペーパーテストをどのように作成していけばよいのでしょうか。具体的な手順例を示します。（所属校のルールを確認してみましょう。）

○学習目標を確認し、問題作成仕様をまとめる

学習活動を通して生徒に身に付けさせたい力を柱に、大問の構成など問題作成仕様をまとめます。このとき、観点が年間指導計画と一致しているか確認します。

○設問のバリエーションと生徒の「解答の流れ」の相関を考える

観点別学習状況の評価に即して生徒の学習成果を測る設問の形態を考えるとともに、予想される解答や記述を想定します。

「思考・判断・表現」を見取る設問にするために、生徒が知識や技能を活用でき、理解を引き出す工夫があるとよいでしょう。

○解答用紙の作成と、配点・解答所要時間を確認する

設問に見合った解答スペースを確保し、小計欄を付すなど、テスト分析と活用に資する集計方法を工夫します。

○採点基準を作成し、出題のねらいや解説をまとめる

採点基準を明確化し、出題のねらいを踏まながら、生徒がどのように考えれば解答にたどり着くことができるかを確認します。

○問題用紙や解答用紙に誤りがないかどうか点検する

必ず複数体制で点検しましょう。



探究の道しるべ

左の「ペーパーテスト作成の手順（例）」を参考にして、次の活動に取り組みましょう。

①五つの項目それぞれに要する日数・時間を推定しましょう。目星が付かない際は、同じ教科・科目を担当している教員と相談してください。

②所属校の年間行事予定と照らし合わせ、各回の定期試験に向けた準備をいつから開始すると良いか、逆算して割り出しましょう。

③初めの定期試験が終了した時点で①で推定した日数と実際とを比較し、次回以降の準備日程について再調整しましょう。

*時間にゆとりをもって作成することは、テストの質の保証はもとより、事故防止にもつながります。

【参考資料】不祥事ゼロをめざして

神奈川県教育委員会不祥事防止職員啓発・点検資料Vol.99「定期試験・成績処理の事故防止」令和元年6月 高校教育課、行政課

定期試験・成績処理の事故防止

定期試験や成績処理に関する業務は、学校の教育活動の根幹に関わるもので、一度のミスであっても、これまでに築き上げてきた生徒や保護者の学校に対する信頼を失わることになります。評定や観点別学習状況の評価の誤り、出欠席の記録等の誤りといった成績処理に係るミスは、生徒の進路を含めその後の人生に大きな影響を与えることもあります。適正なペーパーテストや成績処理の実施に向け、学校ごとの点検表等を用いて、できていない項目がないか確認し、適切な対応を心掛けて事故を防ぎましょう。

5 提出課題やパフォーマンスから見取る

ねらい（観点）をもって見取ること

評価の方法の一つとして、提出課題や作品から学習状況を見取ることがあります。

提出課題から見取る際に大切なことは、目的を明確にしておくことです。生徒にどのような力が身に付くのかを考え、評価規準を設定した上で課題を出しましょう。またその評価規準を、生徒と教員が共有することが非常に重要です。

どのように生徒に返すかを考える

提出された課題はそのままにしておいてはいけません。きちんと評価し、生徒にその結果を分かりやすく伝えます。そして、どうしてその評価になったのかについて理由を伝え、次へつなげます。

そのために、生徒自身が今後の取組に向けて何を改善すればよいのか、すべきことのポイントを絞って理解できるように返すことが大切です。

「ループリック」を使用して評価する

作品や実技試験など、生徒のパフォーマンスを評価するときは、生徒の次の学びにつなげるための工夫をすることが大切です。評価規準に基づいた評価の視点を整理し、チェックすべき要素を具体的にレベル別に定めておくものが「ループリック」です。作品などのパフォーマンスをトータルで評価するのは難しいので、「ループリック」を使用して目標とするべき視点別に評価を行うことは、教員と生徒双方にメリットがあります。

☆パフォーマンス評価

設定した評価規準の実現状況を測るために、生徒に課題を与え、その内容の分析をもって評価を行うものを、「パフォーマンス評価」といいます。必ずしも実演や実技のみを評価すると言うことではありません。

☆パフォーマンス課題

生徒に様々な知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求める課題を「パフォーマンス課題」といいます。

課題に取り組んだ結果の、論説文・レポート等の成果物や、スピーチ・プレゼンテーション等の実演（狭義のパフォーマンス）を評価します。

パフォーマンス課題は模範解答が存在しないため、評価をする際にはループリックを活用するなど工夫が必要です。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

課題に取り掛かれないとき

何をしたらよいかが分からず課題に取り掛かれない生徒には、作成のヒントや材料、仕上げるための方法やコツを示したり、ワークシート等に褒めるコメントを入れたりすることが大切です。

期限を守るために

期限までに提出できない生徒については、課題の内容は理解しているか、どこまでできているか、提出の方法・締切は分かっているかを途中で確認していくなどの支援があると期限を守って提出しやすくなります。



スピーキング（スピーチ）評価のための「ループリック」の例

「○○について英語で話し、内容に関する質問に答える」

	話し方	質疑応答
A	聞き手が十分理解できる速度・声量で話し、理解を促す／確認する工夫をしている。	質問を理解し、文の形で応答ができる。
B	聞き手が十分理解できる速度・声量で話している。	質問を理解し、簡単な応答ができる。
C	聞き手が十分理解できる速度・声量で話していない。	質問が理解できない、または応答できない。
備考	「理解を促す／確認する工夫」は、強調や自然なジェスチャー／アイコンタクトなどとする。	「簡単な応答」は単語、フレーズレベルのものとする。

ループリック評価の良い点

○生徒側：何をどのように努力すべきか理解しやすい。

- ・事前に観点や基準を知らせておく。
- ・事後には診断的効果がある。

○教員側：何をどのように指導すべきか計画しやすい。

- ・評価の観点＝授業での指導項目
(目標との結び付きを意識する)。

ループリック評価の留意点

- ・作成に時間がかかる。
(作成方法の例：まずは基準（B）を設定し、それを満たさないものを（C）とする。（B）の中で質的・量的に高まりがみられると判断するものを（A）とします。)
- ・複数の教員で使用する場合、段階別基準の共通理解が必要。
(前年度の例など、基準となるものがあると良い)

☆評価（C）の生徒に対する手立て

評価（C）の生徒に対しては、（C）のままにしないための手立てが必要です。作品などの場合は、再提出させたものが目標に達するものであれば、評価（B）にするのが良いでしょう。

しかし評価については、一人で判断することなく、同じ科目的担当者同士の共通理解が必要です。評価（C）の生徒に対する手立てについて担当者同士で相談し、決定するようにしましょう。



探究の道しるべ

ループリック評価は、適した課題とあまり適さない課題とがあります。そこで、所属校でループリックを活用している教員を探し、次の点についてリサーチしましょう。

- ① どのような課題にループリックを活用しているか。
- ② ループリック評価に向いていない課題はどのようなものか。
- ③ 生徒の学びにループリックをどのように生かしているか。

作品の評価

作品の制作（製作）を伴う教科・科目では、ともすると最終的に完成した作品だけで評価しがちです。しかし、作品の制作（製作）の途中でも、作品の状況などから評価できる場面がたくさんあります。ただ、実技を伴う教科・科目では評価対象人数が多く、効率的に途中段階での評価を行わなければいけません。デジタルカメラで途中経過を記録したり、制作のプロセスを明確にした上で、そのプロセス上のポイントを評価したりするなど、工夫して行うとよいでしょう。

6 生徒とともに振り返る

学習活動としての振り返り

☆「指導と評価の一体化」

→ 2章-3

単元（題材）や本時における学習の振り返りは、生徒が自分の理解したことを整理するために行う学習活動です。

生徒にとって、単元（題材）ごとの学びの中で、何が分かって何が分からぬのか自分で把握することは大切です。

教員は、生徒の振り返りから、生徒一人ひとりの分かっていること、分からなかったことを分析し、今後の授業の中での工夫につなげる必要があります。生徒の振り返りに寄り添い、適切な言葉掛けをすることによって、生徒の学習に対する意欲を育てるとともに、教員自身も成長するチャンスとなります。 → 2章-3

次時につなげるための振り返り

生徒にとっても、授業で理解したことを確認することが必要です。分からなかつたことがあれば、復習したり、調べたり、次の時間に確認したりする必要があるでしょう。自分のことを自分で理解することはステップアップするチャンスなのです。また、活動の振り返りによって、「自分の考えを発言できた」「次回は友達の意見を聞きたい」といった学習態度の育成にもつながります。

☆「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

1回1回の授業で全ての学びを実現させるのではありません。単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するかが重要です。 → 2章-5

振り返りはいつさせる？

振り返りも学習活動なので、基本的には授業時間の中に位置付けます。振り返りなので、終わりの数分間をあてることが多いでしょう。単元（題材）の最後や家庭学習で振り返りをさせることも含め、学習活動のねらいに合わせて、時間を確保しましょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

効果的な振り返りの活用

授業カードを使い、「目標」「分かったこと」「難しかったこと」などを書き込めるようにすると、生徒は授業の振り返りがしやすくなります。

また、生徒の努力したこと・頑張ったことを教員が拾い集め、それを生徒に返すことを考えましょう。

教員の評価だけでなく、友達によるプラスの評価が生徒本人に伝わることも、更なる意欲につながります。



振り返りシートを活用した振り返り

〈例〉 「家庭科 エコバッグの製作」（10時間扱い）

<振り返りシートのねらい>

- ・生徒が「見通し」をもって授業に取り組み、「振り返り」を行って、次の授業につなげる。

「エコバック」製作記録カード

目標 :					
製作手順		予定	取り組んだ日付	振り返り	先生から
1	製作手順の確認・目標の設定・基礎縫い練習	6/3			予定の日付で進捗を確認させる。 一つの工程に時間がかかったり、やり直したりすることがあるので「取り組んだ日付」欄は2列以上設ける。
2	デザイン画作成	6/3			
3	裁断・印つけ	6/10			
4	本縫い①ポケットつけ	6/10			
5	②両脇を縫う				授業の終わりに授業の振り返りを記入させる。
6	③紐をつける				毎時間、進捗の確認をしてチェックを付けたり、生徒の振り返りに対してコメントを記入したりする。毎時間の確認が難しいようであれば、作業のまとまりごとにチェックをしてもよい。
9	仕上げ				時間のかかっている生徒については作品を確認し、次回の作業についてアドバイスを記入する。
10	発表会・振り返り				

【完成後の振り返り】※学んだことや今後にいかしたいことを書こう

自己評価

A B C

<活用方法>

- ・時間の最後に振り返りを記述させ、記述内容や作業の進捗状況を確認後、次の時間の始めに返却する。
- ・本時の作業や、やり直しの場合は理由等を確認させる。
- ・同一の作業段階の生徒を集めて、作業の確認や指導をする。

☆「指導に生かす評価」として生徒の振り返りも重要

振り返りにより、生徒の進度やつまずき、疑問点、理解度を把握し、次時の指導に生かしていきます。

実技を伴う教科での振り返り

技能の習得には毎時間の積み重ねが必要です。振り返りを有効に活用して、次のステップへ進ませ、技能の向上や作品を完成等へ導くとともに、良いものを目指す姿勢を追求させましょう。

☆できたことを互いに認め喜び合える関係づくり

振り返りの中で、できなかったことばかり考えるではなく、できるようになったことを共有できる仲間づくり、雰囲気づくりを考えましょう。皆で伸びていくことによって、より学びが深くなり、自己肯定感を高め、学習する喜びや意欲につながっていくでしょう。

「生徒による授業評価」

神奈川県の県立高校では、生徒の確かな学力を育成するため、各学校における教員の指導力の向上や授業改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とすることを目的として「生徒による授業評価」を実施しています。この活用を図ることによって学校の実態と課題を把握し、組織的な授業改善を継続的に実践していくことが求められています。

7 授業実践を振り返る

☆振り返りの方法

次の授業づくりにつなげるために、授業者として気付いたことや生徒の声などの記録を残すことを心掛けましょう。記憶の新しいうちに残した記録は、振り返りの際の大切な資料になります。

また、生徒が取り組んだプリントや振り返りシートの記述状況なども、次の指導に生かしていきましょう。

このような記録や資料の活用に継続して取り組める方法を工夫してみましょう。

さらに、必要に応じてビデオ撮影したり、録音したりして振り返ることも有効です。

1 単位時間の振り返り

単元（題材）全体の計画の有用性を見極めるには、1単位時間ごとの授業や題材のまとまりごとに、その進捗状況、そのときの生徒の反応などを把握しておくことが大切です。その際、早急に軌道修正すべき点があると判断した場合には、可能な範囲で迅速に次時以降の計画を修正する等の調整が必要となるでしょう。

単元（題材）全体の振り返り

授業は、「単元（題材）全体を見通して構想を練る」ことが大切であり、その全体像に基づいて、1単位時間の授業をどのように展開するのか、具体的な内容や方法について計画を立てて実践します。

そして授業の実施後もまた、単元（題材）全体を見渡した振り返りを行うことが重要です。もちろん1単位時間の授業における指導内容を振り返ることも必要ですが、単元（題材）を通して、生徒に力が身に付いたかどうか、計画内容を見直す視点を持ちましょう。

目標の実現につながりましたか？

授業は事前に設定した観点別の評価規準に表れている「生徒に身に付けさせたい力」の育成のために行っています。そこで、その時間の計画にあたって明らかにした目標が実現できたかどうか、生徒に対する評価を通して振り返ります。

また、授業の流れを構想した際に考えた工夫は目標の実現にとって有効だったでしょうか。生徒の学びを深めることにつながったでしょうか。この点についても振り返り、次に生かします。これが、教員の指導改善のための「指導に生かす評価」ということです。

個別支援が
必要な生徒
への対応を
考えよう

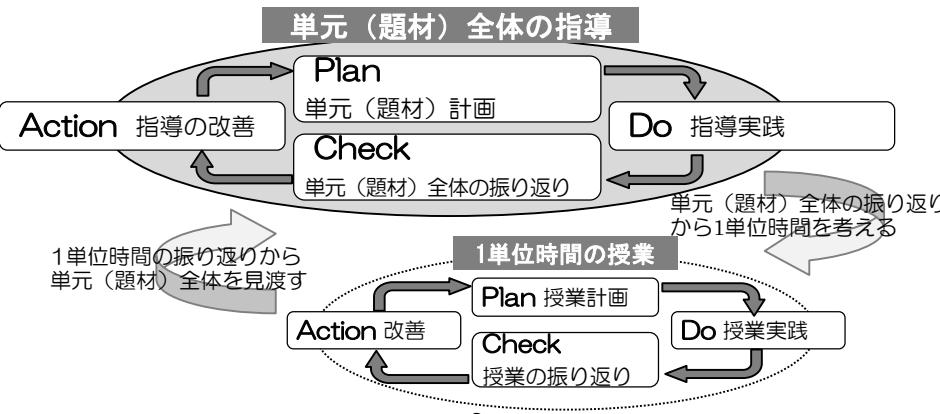
キーワードは達成感

それぞれの授業を振り返る中で、評価（C）の生徒における個別の手立てを考えましょう。キーワードは達成感。短時間でも個別に学習を見たり、ワークシートで書き込み式のものを用意したり、同じプリントをもう一度やってみたりするなど生徒と相談して次の時間に向けてサポートしていくと良いでしょう。

振り返りの視点

目標を立てて授業を行い、授業実践を振り返り、次に生かすという「P D C A」サイクルの「Check」の段階であることを踏まえ、次の「Action」に生かすことを意識して振り返りましょう。

1単位時間の授業の振り返りを積み重ね、単元（題材）全体を見渡した振り返りを行い、計画を見直していくことが重要です。



【生徒に身に付けさせたい力と目標設定について】

- 目標の設定は、生徒の学力・学習状況と合っていますか。
- 目標の実現はできましたか。

【評価規準の設定と評価方法について】

- 評価方法は妥当性・信頼性があるものでしたか。
- 評価（C）の生徒への支援の手立ては適切でしたか。

【学習活動について】

- 主体的な学びを促す活動でしたか。
- 活動の時間は十分でしたか。
- 資質・能力の育成に適した活動でしたか。
- 効果的な発問ができましたか。
- 効果的な教材・教具の活用ができましたか。
- 個々の生徒への配慮をしましたか。
- 学習の展開は適切なものでしたか。

☆授業観察の視点

他の教員の授業から学ぶことは多いものです。授業観察の視点について考えます。

○生徒を見る

- ・生徒の視線
- ・生徒の主体的な活動の様子
- ・生徒のつぶやき、行動
- ・生徒のワークシートへの記入状況
- ・生徒のグループ学習での発言内容
- ・生徒のICT機器の使用状況

○授業者を見る

- ・生徒との関わり方
- ・生徒の活動状況の把握
- ・授業者の発話、振る舞い
- ・板書の仕方
- ・授業者のICT機器の使用場面と活用状況

○授業展開を見る

- ・授業の流れ（時間配分）
- ・目標と学習活動の関連
- ・目標の実現状況

○学習環境を見る

- ・掲示物の工夫
- ・学習に集中させる工夫
- ・教材・教具の工夫

R-P D C A サイクル①

校内授業研究などは、「P D C A サイクル」に、事前の実態把握「R : Research（調査）」を加えた「R-P D C A サイクル」に沿って推進することが求められます。校内授業研究では、「学習状況調査」、「生徒による授業評価」などを活用して学校の実態と課題を把握し（Research）、その課題の解決に向けて研究計画を立て（Plan）、組織による授業づくりを行い（Do）、実践した授業や研究活動を評価し（Check）、その評価結果を分析して次の授業づくりへつなげたり、次年度へ向けた研究活動の改善を行ったりして（Action）、更なる課題の把握（Research）に発展させます。（4章－8に続く）

8 問題点や改善点を整理する

☆評価が持つ本来の機能

評価が持つ本来の機能として、「学習者である生徒が学習の到達状況を把握するもの」、「授業者である教員が学習指導の見直しにつなげるものの」という二つが挙げられます。これは、生徒自身が自分の学習を振り返って、何が身に付いているか、どこが不十分であるかが分かり、学習の改善に資するものであるということだけでなく、教員・学校が学習指導や教育課程の在り方を問い合わせ直す情報として活用することを意味しています。

評価結果を受け止めよう

生徒の提出物を評価したとき、こちらが意図したものとは違う解答ばかりで、求めているものとは異なることがあったとします。そのとき、皆さんはどのように感じますか。「どうして理解してくれないのだろう?」と考えたことはありませんか。

そのようなときは、生徒に提出を求めた課題について客観的に考える必要があります。課題への取組状況は、教員が実践した授業の成果を表しています。自分の教え方に原因があったのではないか、設定した目標が生徒の学習状況と一致していなかつたのではないか、と振り返ることが大切です。

そして、そのような結果になった原因を探り、次には生徒の学習状況に合った課題を用意することで、より良い授業づくりにつながります。

評価結果を分析しよう

より良い授業づくりのために、前述の例で考えると、「提出物に書かれたものは、なぜ、教員が意図したものと違う解答ばかりなのか」について分析する必要があります。

その理由として、授業が分かりにくくて理解できなかった、適切な発問がなされなかった、学習の内容が難しくて分からなかった、書くための時間が不十分だった、書き方が分からなかったなど、様々な要因が考えられます。

生徒の実態から、原因を追求し、問題点や改善点を整理しましょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

生徒の様子にヒントがある

授業観察の際には、生徒の取り組んでいるあらゆる様子から、その意味を把握しようとすることが重要です。寝ている生徒、ボーッとしている生徒、その場にそぐわない発言をする生徒、おしゃべりする生徒、このような生徒は一見やる気のない生徒に見えます。しかし、なぜそのような行動を取るのでしょうか。「分からない」と言えないために静かにしている生徒に目を向けることも授業を分析する大切な視点です。



自らの指導を振り返るチャンス

ワークシートに書かれた生徒の解答を見て、「生徒への指示が適切だったか」「事前の指導で理解させるべきことが徹底できていたか」などと、自分の指導をもう一度振り返ってみましょう。

〈例〉 「理科・化学」

理科・化学ワークシート

「実験で観察した化学反応についてまとめなさい。」

化学の授業で、実験後、このようなシートを提示し活動をさせたところ、生徒は様々な解答を書いていました。

生徒A
の場合

希塩酸を加えたら、液体が白く濁り、試験管の底に沈殿が生じた。

生徒B
の場合

実験で見た化学反応は
 $\text{Ag}^+ + \text{Cl}^- \rightarrow \text{AgCl} \downarrow$ だと思う。

生徒C
の場合

よく分からぬ。

観察した生成物の色や反応の様子を記述したり、観察結果を化学反応式で説明したりと、記述の仕方がバラバラだということは、指示の仕方を反省する必要があるということです。ワークシートにも課題があるかもしれません。

また、生徒Cが「よく分からぬ」と解答した理由も考えます。実験の内容が分からぬのか、うまく観察できなかつたのか、ワークシートの書き方が分からぬのか、時間がなくて分からぬと書いたのかなど、いくつかの理由が考えられます。

これらの反省点を授業づくりにいかすようにしましょう。



探究の道しるべ

①これまでに自身が作成したワークシートの中から、左の<例>「理科・化学」のワークシートのように、生徒の解答が分かれてしまった設問がなかったか、振り返りましょう。

②①のような解答があつた設問は、答える方向性を整えるために、問い合わせ方をどう改善すると良いのか、考えましょう。

③①のような解答が見られない設問は、自身がどのように工夫をしたためなのか、客観的に分析しましょう。

R-P DCAサイクル②

(4章 - 7から続き) 振り返りは実践した授業や研究活動を評価する活動にあたり(Check)、身に付けさせたい力が育成されたのかを判断します。生徒のワークシートや振り返り、作品などを資料として結果の分析を行います。そして、その評価結果を分析して次の授業づくりへつなげ、次年度へ向けた研究活動の改善を行います(Action)。

各学校における育てたい生徒像を再確認し、次の取組の視点を明らかにしていきましょう。

9 授業研究を活用する

授業研究のねらい

授業改善のためのテーマを決め、その解決のために手立てを考え、単元指導計画（学習指導案）を作成し、事前に検討し、授業を参観し合い、事後等に研究会を開催する一連の取組が授業研究です。学習指導に対する意見等を参観者から得られる研究授業は、授業研究の検証を目的として行うものであり、授業づくりに関する課題等を明らかにして、その後の指導改善に役立てることができる貴重な機会です。常日頃から指導の振り返りを行なながら授業改善に努めますが、「研究授業」という形を取ることによって、教員同士で協力しながら客観的に問題点の原因を探ったり、相互に改善方法の提案を試みたりすることが可能となります。

☆教材の工夫がしたい

「研究授業のために、教材を工夫して作成したいけれど、学校ではつくれるのだろうか…」

そんな声にお応えして、総合教育センターの学校支援室には、「教材工房」があります。

ここには、教材作成に役立つ機器（大判プリンタ、高速スキャナ等）がそろっています。

所員が教材づくりの相談に乗ることもできます。

→ 参考資料4

研究授業の準備

研究授業を行う際には、最初に設定した授業改善のテーマに基づき、授業づくりの課題を明確にすることが必要です。そして、課題解決のためにどのような手立てを取るのか、どのような工夫をするのかを考えます。単元指導計画（学習指導案）を作成したり、教材・教具を工夫したりといった様々な教材研究をすることいますが、その全てが授業研究につながり、自身の力になります。

研究授業の留意点

研究授業では、授業のポイントを参観者にあらかじめ伝えておくことが必要です。授業のねらい、単元（題材）目標や単元（題材）構想、授業づくりの課題と解決に向けた工夫点等を明確に示すことで、適切な助言がもらえます。また、記録メモの作成やビデオ撮影等によって、自分の授業を客観的に振り返ることができ、授業改善につながります。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

ビデオカメラを用いた授業研究

教室の前方から、ビデオカメラやタブレット端末を用いて生徒の学習の取組を録画しておき、授業研究としてその動画を見合うことは大変効果的です。

表情や手の動きから、生徒の学びを見取ることができます。首をかしげたとき、何か言葉を発したとき、それが何を意味するのかを検討することで、生徒にとっての授業の意味が明確になります。→ 1章－9

校内授業研究の進め方（例）

組織的協力体制で実施

授業テーマを明確にする

- 育てたい生徒像は何かを明確にする。
- 勤務校の研究主題や自己課題を踏まえたより具体的なテーマを設定する。

所属校の学校教育目標を確認します。

単元（題材）の構想を確認する

- 生徒に身に付けさせたい力は何かを確認する。
- 評価規準を設定する。
- 目標実現につながる学習活動を組み立てる。

学習指導案を作成する

- 授業の展開の仕方を確認する。
- 観点の評価規準を確認する。
- 単元（題材）の流れを構想する。
- 1単位時間の学習活動を明確にする。
- 研究との関わりが見えるように工夫する。

教員個人でなく教科や同一科目担当者で組織的に授業づくりを行うことにつながります。

参観のポイントを確認する

- 学習活動の工夫点を示す。
- 課題や助言が欲しい点を示す。
- 研究授業までに、検討してほしいことや助言してほしいこと等を伝えておく。

授業の記録をとる

研究授業の実施

- 発問が課題ならば発問をメモしてもらう。
- 立つ位置や生徒とのコミュニケーションに課題があれば、教室全体を撮影して動きを確認する。
- 生徒の学びの様子がつかめなければ生徒の表情を撮影する。

☆研究協議会の方法

授業の振り返りを問題解決型であるワークショップ形式にするとよいでしょう。ワークショップとは、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で討議したり創作したりする学びや創造のスタイルです。参加者一人ひとりが互いの意見を出し、全員で改善の方向を導き出すので、学校に「同僚性」を築くこともできます。

研究協議会を実施する

- 授業研究のねらいを確認する。
- 研究授業の記録を参考に検討する。
- 目的に応じた手法を用いて研究協議会を実施する。

授業研究をまとめる

- 研究協議会の内容を各自の日常実践にどういかすかということについて記録する。

【参考資料】総合教育センター刊行物

- ・「実感につなげよう！今、求められる授業改善Ver.2」2020年
- ・「カリキュラム・マネジメントを促進する協議の工夫」2020年

→総合教育センター刊行物のダウンロードは、P122へ

4 章 学びの記録

1 本章を読んで感じたことや実践したいことをまとめましょう

2 本章の内容を意識しながら他の教員の授業を参観し、
気付いた点を挙げましょう

3 他の教員からの助言のうち、本章の内容に関わる事柄を
まとめましょう

4 本章の内容を授業に反映させるために改善すべき事柄を、
具体的に挙げましょう